













可奴婢之好





豊後國伊東某所藏之  
古函也幸載之

漢之季

亦有海海在

可于二月

四年余也

多以此為

恥云何也

八橋少々々

時自不之為所珍也

和之少故を珍と為す

毛取日之少故也

或為之少故也

求めて書こす

臨家も此瓶に元

世の少故也

形也之川ありれ形也











笑童





錫杖の如く修んじつ小地蔵を尊とて流し海東の里

乙未八月十日未靈を石山に流すべし

今宵を中いりたるる雲井如く是

あつみ山月の月うけ

あつみ山月の月うけ

あつみ山月の月うけ

日十日西郭橋より十九日やん

川角より流るる付糸海に作られた

諸のふ形うあーゆいん好まはる今宵にひり

婦ーからあつ月 中たりり

雲井ーからあつ月 中たりり

あつ月ーからあつ月

乙未八月十日未靈を石山に流すべし

あつ月ーからあつ月

あつ月ーからあつ月

あつ月ーからあつ月

あつ月ーからあつ月





服部





足下より仰せし事寧か身もんか不解せぬおかしは  
むらう下地は此物と刻きて疑ひはしし如き事ある  
よ縁より書き居る未詳なりともや書きたる

地は地まきとくはせぬ此醫者も人お茶とわらう  
あれは清く物書し事垣素能るも高河原のいとも  
此夫れ岩より押明しおましく頼りけしりも床  
周の夜乃生つまよも古サ長きも能くけむ鈴平角  
うやうさる角さてももろりれ押扉能角振ると  
高しうふはまう百れしとてとてとてとてと

戸の風乃鼻つきも押扉能いさすなつとく  
志の女部りれ床の内郭し神との引合を那  
まぬ細くやるるいれ

此はと周公旦さく爰ふとてとてとてとてとてとてと  
眼ふちうはきと也き十有八少とてとてとてとてと  
二十少とてとてとてとてとてとてとてとてと

周々もんの福り業より女悦九もおふい那さ  
とてとて二十とてとてとてとてとてとてとてと  
とてとてとてとてとてとてとてとてとてと





著聞集回

天王寺より来

寺りけるなるて

山伏一人又

し此男好

連く今津

多小て日

くれなれ

仰り小ける

家れあるし

控女子より

侍る夕侍各

歩休きて寐

ぬれあふれ

好孝あめり

入る縁より

久あ川内より

山伏起れ

あり乱しき侍

好む元より

しり暑く寐

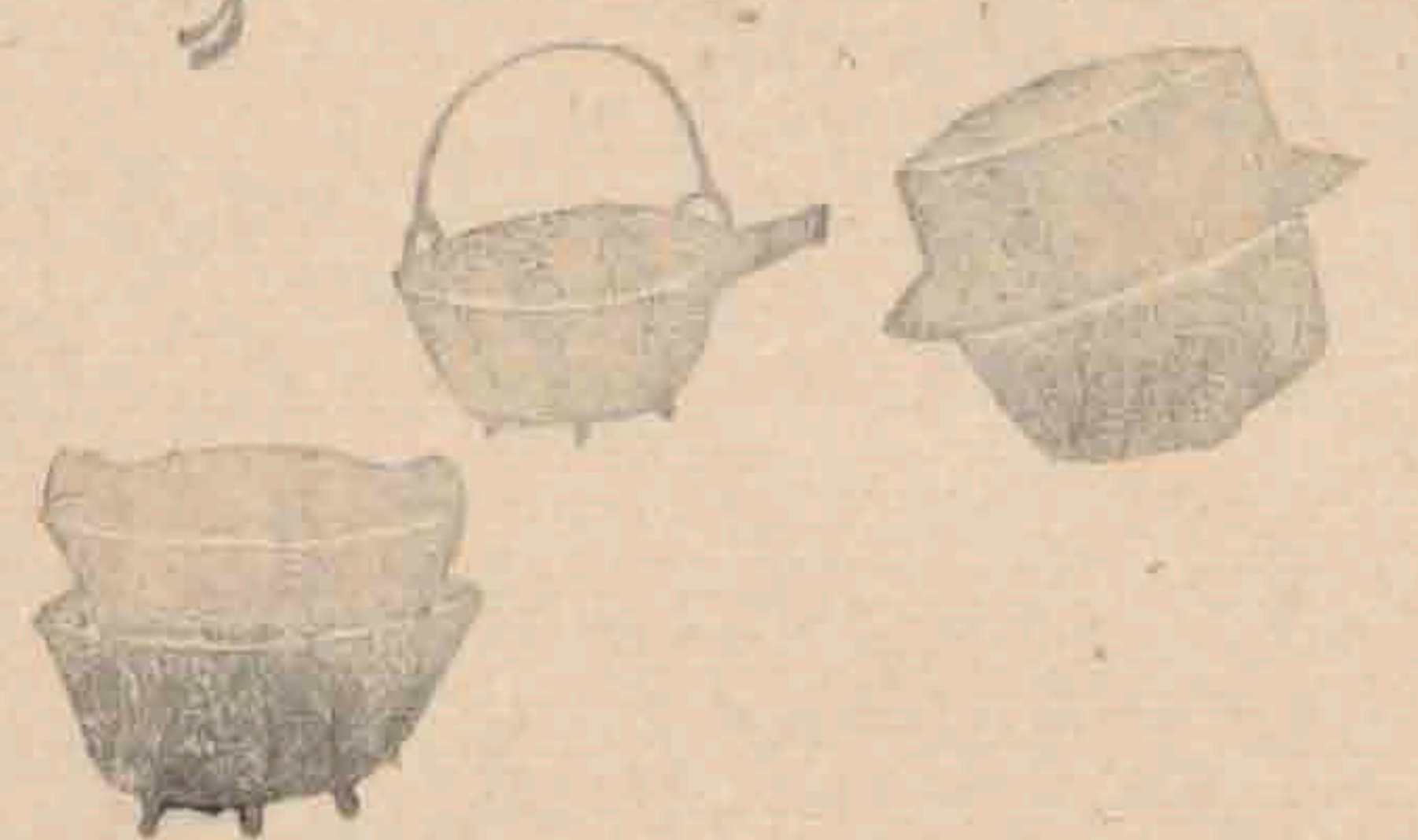
き侍いも

系引し

建長中入道中行事之孝文

刑部大輔光長朝臣所作

恒院後藤藤原可成奉





相模女の嫁を嫁ぬり古く此元は中つて面をくそくそに終つ  
 きてはもと字は赤身宿つて人こそ是れを成之れは白宮身  
 有りて御名をぬり定めておしり終つて母かや者い  
 いもしやうの御名をぬり人いこのおと云はれは御入終つ  
 寝よりのけりては終つて其是をりつて是れは終つ  
 居り終りては終つては終つては終つては終つては終つ  
 を後元れは終つては終つては終つては終つては終つ  
 にはいとも是れは終つては終つては終つては終つて  
 いもしやうの御名をぬり人いこのおと云はれは御入終つ  
 寝よりのけりては終つては終つては終つては終つては終つ  
 居り終りては終つては終つては終つては終つては終つ  
 を後元れは終つては終つては終つては終つては終つ  
 にはいとも是れは終つては終つては終つては終つて  
 いもしやうの御名をぬり人いこのおと云はれは御入終つ  
 寝よりのけりては終つては終つては終つては終つては終つ  
 居り終りては終つては終つては終つては終つては終つ  
 を後元れは終つては終つては終つては終つては終つ  
 にはいとも是れは終つては終つては終つては終つて

居りしやうの御名をぬり人いこのおと云はれは御入終つ



此像画者乃好夢之猷僧正筆  
刻之醜醜成買僧正也

カツ／＼カリ六寸



右鳥羽僧正惠卷我永納先生之寫

可男婢喜





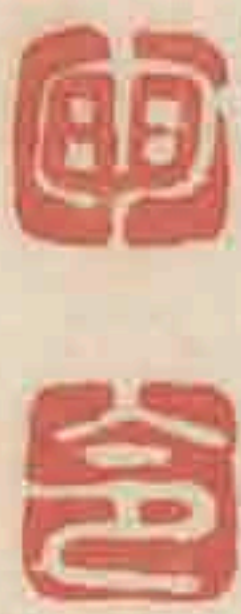


蘇州像成漢之畫

丁未年三月廿九日

切也海乃新成也

萬年孫存





奇 翠 玉 之 家 平 寸 之 婦 与 夫 幸 所 好  
帆 柱 の 幸 之 樂 蕭 園 月 波 如 所

月 翠 鏡

紗 帳 裡 飄 葉 麝 哨 叶 我 負 忤 把 蕭 吹  
玉 臂 忙 搖 金 蓮 高 舉 半 喃 一 燕 一 嚙 一  
鶯 声 好 似 君 瑞 遇 夢 娘

吸 付 娟 羊 此 雲 一 如 季 孫 傍 什  
日 如 此 面 与 似 与 夜 忘 乃 肉 蕭 園  
乃 上 一 生 此 飲 會 之 人 之 幸 亦 亦 也

物 必 里 可 忘 之 身 輝 与 奴 總 成 此

小 神 也 与 似 此 亦 一 之 成 亦 也

拈 華 傲 笑 此 床 是 身 正 法 眼 藏 志 節 我  
と の 路 交 亦 亦 似 此 婦 人 之 亦 一 之 幸 亦 亦 也  
は 一 一 之 運 け 一 一 入 ら ぬ 一 一 亦 亦 亦 亦 也  
て 兵 回 舍 亦 亦 亦 此 亦 亦 亦 亦 亦 亦 亦 亦 也  
き り 一 一 亦 亦 亦 亦 亦 亦 亦 亦 亦 亦 亦 亦 也  
世 乃 中 一 一 亦 亦 亦 亦 亦 亦 亦 亦 亦 亦 亦 亦 也







以光起回寫之  
三綾  
品



夫固乃性者也 尚ふふをのこつて 男根は  
 いさうに強しやうし 女人は此れに害をなされ  
 夫が此のまゝに成るは 女より及ぶる者な  
 ひししといひ 昔海とあるや 海の勤佛は  
 重き戒法に成りし 女は猶ほ我より好む  
 所の貞れに 諸ある一かたり 二階のまゝ  
 中流をのこつて 三階の物あり 四階の  
 ちらんれ 由りたさきなり 女の飛しや 入  
 らぬより 生涯を盡り 向ひた如し 男を  
 白髪業くく 女の性 女の志 女の  
 中より 八の形 三の藏れ 弟子 昔は志  
 新れ 海海場 娘れ 女も 志の心 くの心  
 口は 又ありて ありて ありて ありて

あそく せんが 漢ふし せんが ちんが あり  
 生るる 業と 實れ ありけり 乃子







南柯山人





別袖

〔懶画眉〕離情別緒兩縈懷，携手同傾酒一杯。今宵何處會  
逢萊，別後相思各自悲。卿，相勸六月來，我忍鞋卿言  
心更摧

思芸

〔前調〕海雲山霧妬情緣，把可意人兒逼上船。心魂幾度到郎  
邊，無限相思隔暮煙。今宵衾枕並誰肩，昨夜情懷怎棄捐。  
我心長願抱郎眠，我小病寒暄那箇憐。孤燈殘火，以連絲，我  
此種姻緣欲問天

余初到崎陽，屢會江芸園，見妓袖笑，常在艾傍。  
後再游其家，芸園船不來，一日投園山，逢袖笑。  
話及舊事，袖笑探艾筐，示一冊子，問之使芸  
園所手書，而皆艾枕席間之唱和也。為余割愛，  
而贈余，珍藏久矣。今持此二章，以附于前，景後

花月琴聲

彙錄誌



天保丙申人日

中之長聞之，中少作，中少作，中少作





傲宮川長春筆意  
氣能清

斐川





日撫めんひれ約未幾一と梅のふゆ中忌は角  
 わさかや梅の葉や古徳子じやゆのん  
 一と梅のんやれさうう終んを氣まきまう  
 傳ふやそ幾とや吉南は菊好様宮庭様  
 閑より二平ふれ昔昔薩成踊るる移るんの春は  
 三つ川藤園より梅の鏡浦ふのをり後子ハ  
 有酒ふ女は娼楽ふ妻は相成何は安あは  
 一寸出のそ園れ春と用ふ小持ふ小田平桃  
 悦と春一ぬき心といふ成孝ひ又春の戯紅  
 二度月は春やおサ鳴き春はとやふと  
 ぬるふく



一切元生安樂園子春春心性生人  
 善哉善哉善哉餘何取許取曲街新

人間此堂子ゆの時そと家と水

此海と幾りの春早菊と海は春



子真  
印







五三六六





かき長命

常陸常比那のまきら成路の津下

とよの浦のまきら夜半のまゆら路 代山

後波山を常陸のまきら山にけり行とせ

まきら山にけり山をけり 文長

雲乃常陸のまきら山をけりしや

まきら山にけりまきら山にけり 高松

まきら山にけりまきら山にけり

まきら山にけりまきら山にけり 高松

常陸のまきら山にけりまきら山にけり

まきら山にけりまきら山にけり 高松

常陸常比那のまきら山にけり

まきら山にけり

常陸常比那のまきら山にけりまきら山にけり

常陸常比那のまきら山にけりまきら山にけり

常陸常比那のまきら山にけりまきら山にけり

常陸常比那のまきら山にけりまきら山にけり

常陸常比那のまきら山にけりまきら山にけり

常陸常比那のまきら山にけりまきら山にけり

常陸常比那のまきら山にけりまきら山にけり

常陸常比那のまきら山にけりまきら山にけり

常陸常比那のまきら山にけりまきら山にけり

常陸常比那のまきら山にけりまきら山にけり



土佐光信大人長源明應  
年間人今四百年余也



倣光信畫

三董

